

第二回佐倉市文化財保存活用地域計画策定協議会 議事録

出席者	事務局	佐倉市 文化課 猪股、松田、小林、小倉、須賀、遠藤 ランドブレイン株式会社 (LB) 平田、安武	
(敬称略)	委員	濱島委員、小島委員、宮間委員、鶴岡委員、村田委員、慶田委員、サカモト委員、石橋委員、速水委員 (金井委員代理)、菅澤委員 (金井委員代理)、滝沢委員 (鈴木委員代理)、小田委員 (菅澤委員代理)、樋口委員 (松丸委員代理)	
日時	R4. 8. 18 13:30~16:30	場所	佐倉市立中央公民館 大ホール
資料	<ul style="list-style-type: none"> ・委員名簿 ・資料「佐倉市の歴史文化と将来像について」(事前送付) ・シート① (事前送付) ・シート② (事前送付) 		

内容

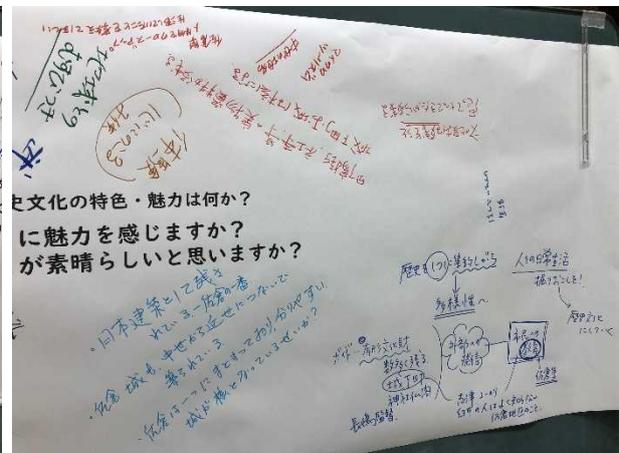
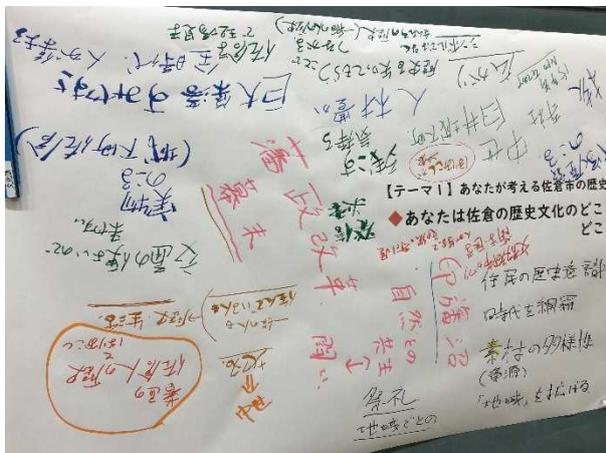
佐倉市文化財保存活用地域計画の策定に向けて、佐倉市の歴史文化の特色・魅力や将来像のターゲットについて、ワークショップ形式による意見交換を行った。

1. 歴史文化の特色・魅力について

市より文化財保存活用地域計画における歴史文化の考え方について説明し、たたき台として5つの佐倉市の歴史文化について提示した。そのうえで、佐倉市の歴史文化の特色や魅力について意見交換を行い、全体で共有を行った。

【講評】

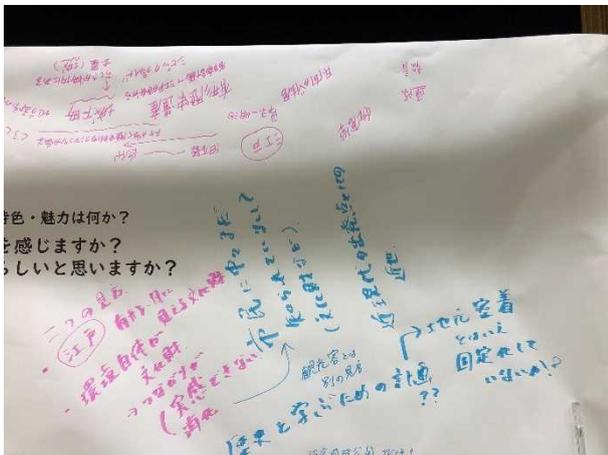
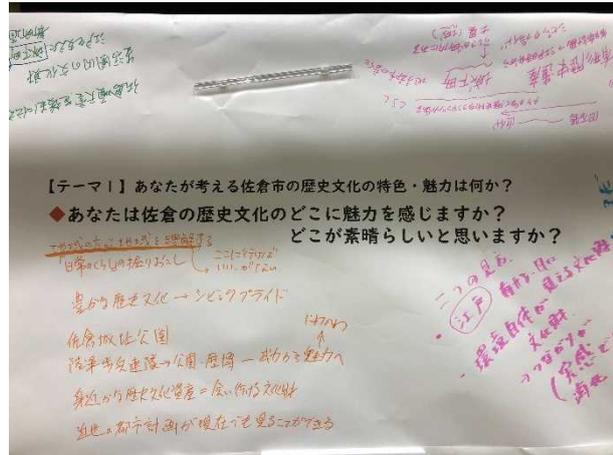
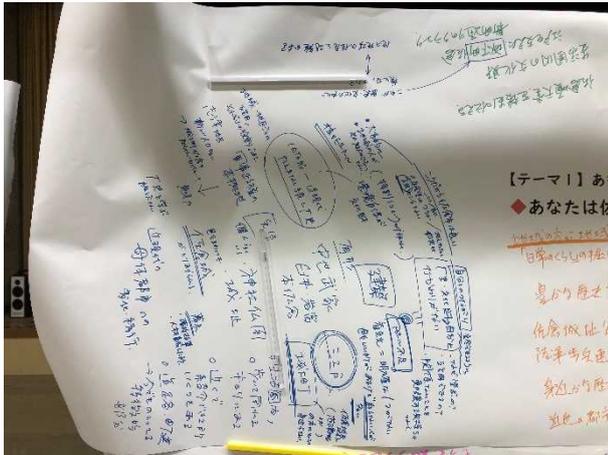
(1-1)



- ・印旛沼の自然という特徴について、「自然との共生」だけでなく「自然との闘い」という視点が挙げられており、おもしろいと思った。
- ・「歴史を1つに集約しがち」という意見について、日本では、地域の歴史を語る際にアイコンのようなものをいくつか作り、そこに地域の歴史像を結びつけていくという方法が採られることが多い。特別な優秀な人物を顕彰し

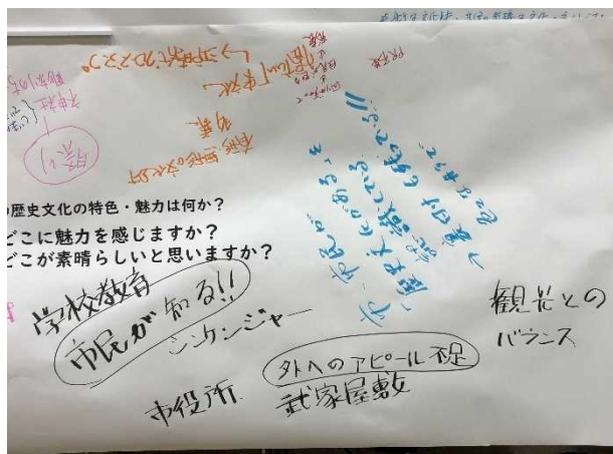
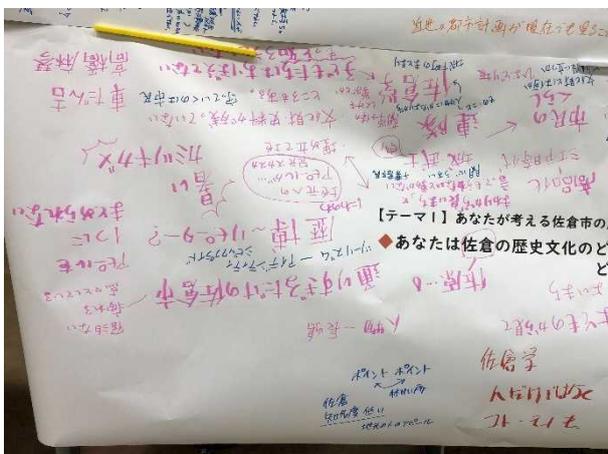
たり、お城に集約したりされることが多く、佐倉市の場合には、城下町や堀田氏、千葉氏などに表象されがちという印象がある。これからの地域史においては、まちの多様性が分かるような歴史や、それを裏付ける文化財を大事にしていかななくてはならないのではないかという話をした。

(1-2)



・「地域の方が地域を理解する」にあたって「ここに行けばよい(という場所)がない」とあるように、博物館などの歴史を学べる場所がないという意見がある。このような意見を踏まえて、どのような取り組みが必要か考えていく必要がある。

(1-3)

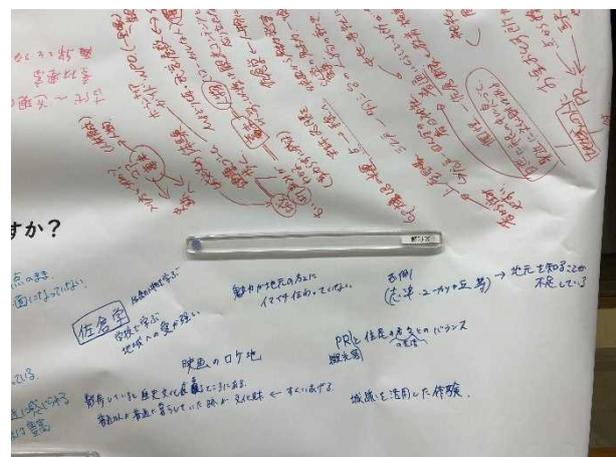
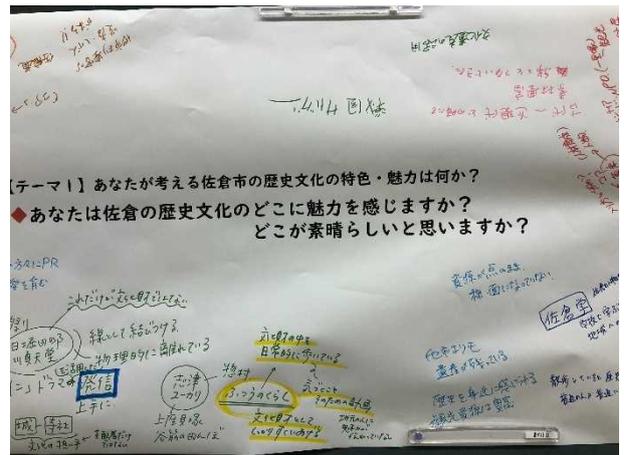
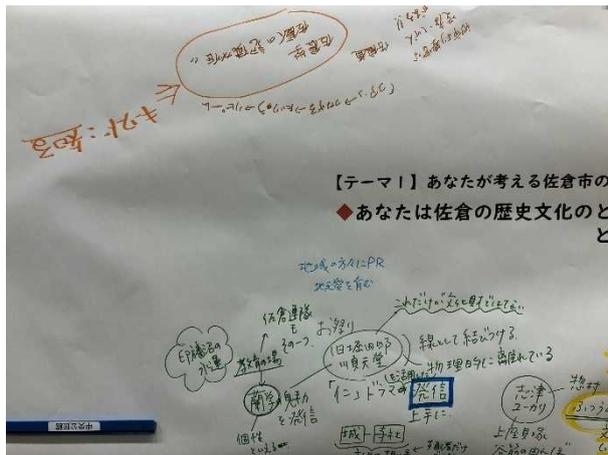


・「通り過ぎるだけの佐倉市」、「宿泊(場所がない)」、「疲れる」、「点々としている」という意見については、学校で「佐倉学」を教えているが、郷土の人物について先生がただ話すだけなので、子どもたちの関心を通り過ぎてしまうことが多く、子どもたちが佐倉について勉強したという気持ちになっていない。そのため、佐倉市がどのようなまちなのか全く知られないまま子どもたちが卒業してしまう状態になってしまっていると思う。

・佐倉市を物理的に通り過ぎるだけでなく、きちんと学べていないことで心情的にも通り過ぎてしまっていると理解

した。

(1-4)



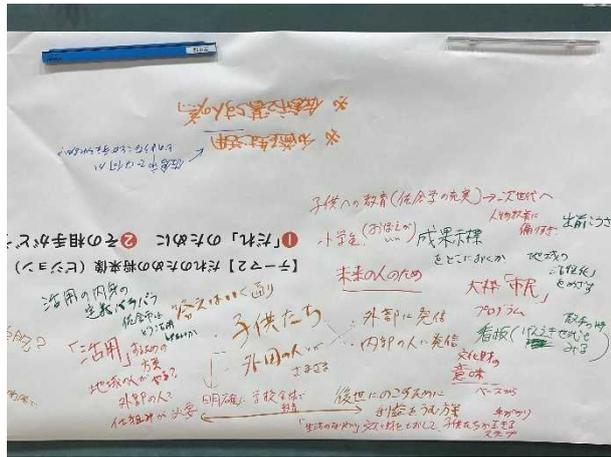
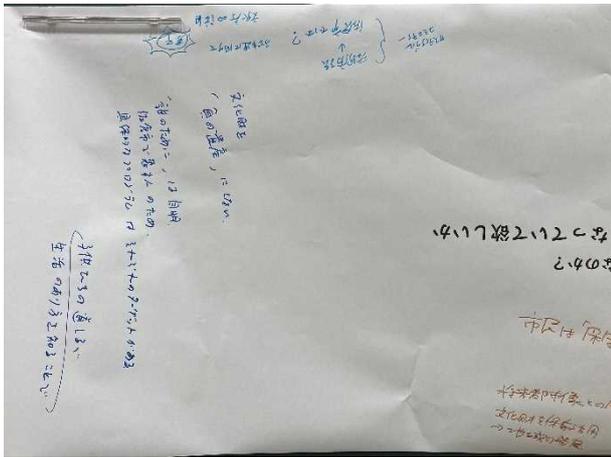
- ・「戦国サバゲー」というキーワードは、これは戦国時代を再現したサバイバルゲームをするといった主旨のアイデアとして面白いと思った。
- ・「普通の暮らしで文化財の中を日常的に歩いている」、「それに気づくこと、そのための計画」、「地元の人に魅力が伝わっていない」といった意見については、佐倉市では特別なものだけが取り上げられてしまっており、ただの歴史の勉強で終わってしまっており、わたしたちの生活とどのような関わりがあるのかが見えてこない。普通の人が普通に暮らしてきたこと自体が歴史であり、文化財であるということに、もう少し目を向けないといけないと思う。佐倉市にある突出したものについても、結局は普通の人の普通の暮らしがあってはじめて作り出されるものであるため、今回の計画においては未指定の文化財を掘り起こしていくことも非常に大事な仕事だと思う。佐倉市には、上座貝塚周辺の田圃など、縄文時代や弥生時代から人がずっと住んでいたことで続いてきたものがあり、そうした痕跡が地名や神社などにも残っている。地域の文化財というものを考えたときに、身近なところで自分に関わるものという視点が必要なのではないか。

2. 将来像 (ビジョン) について

市より文化財保存活用地域計画における将来像について説明し、文化財を通して市がどのような姿でありたいか検討するために、具体的に「だれのために」、「どのようになって欲しいか」意見交換を行い、全体で共有を行った。

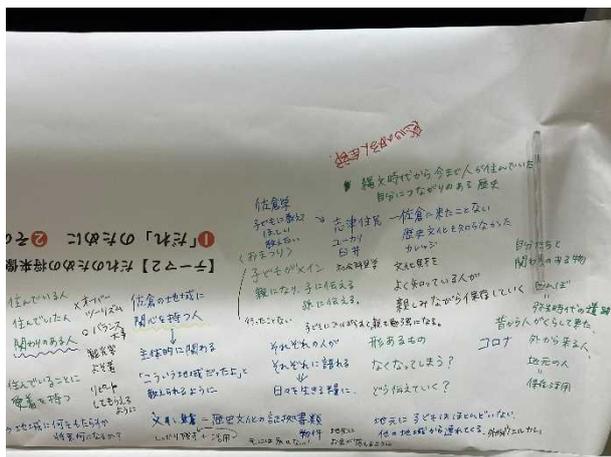
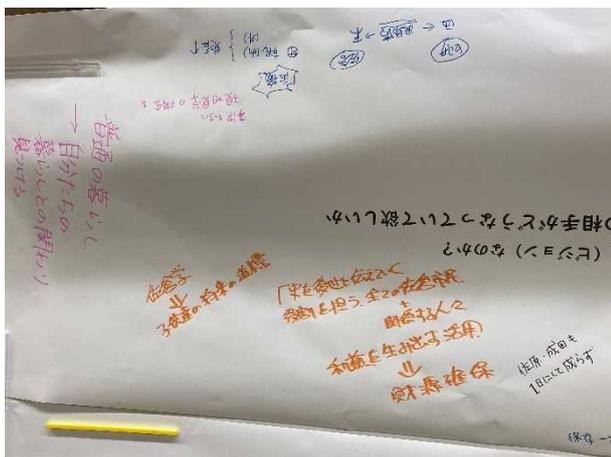
【講評】

(2-1)



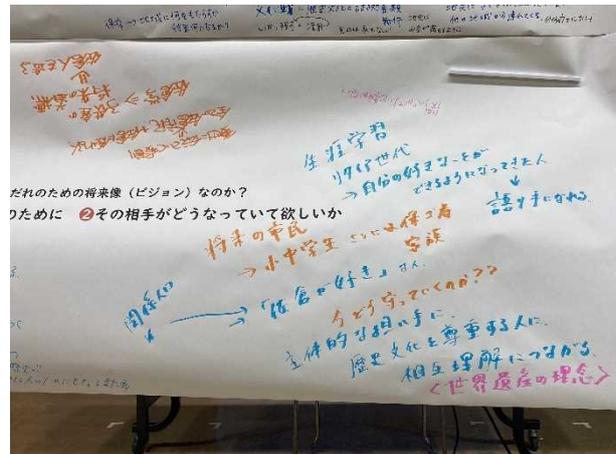
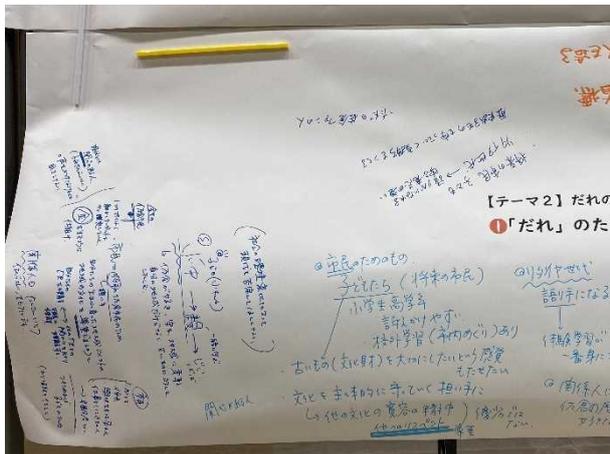
・「文化財を「負の遺産」にしない」という意見が出てきている。また、「誰のために」は自明で、「佐倉市で暮らす人のため」であり、「具体的なプログラムはそれぞれのターゲットがある」という指摘はそのとおりだと思う。具体的なプログラムの検討にあたっては、それぞれのターゲットにどのようなアプローチができるかを考えていくことが重要になってくると思う。

(2-2)



・佐倉市は、東京都に近い志津地区・ユーカリが丘地区に人口の6割以上が住んでおり、人口分布にかなり偏りがある。今まで佐倉地区が城下町として重点的に語られることが多かったが、志津地区・ユーカリが丘地区に住んでいる人たちはどのように見ているのか、逆に、佐倉地区に住んでいる人たちは志津地区・ユーカリが丘地区をどのように見ているのかは大きな違いがあると思う。

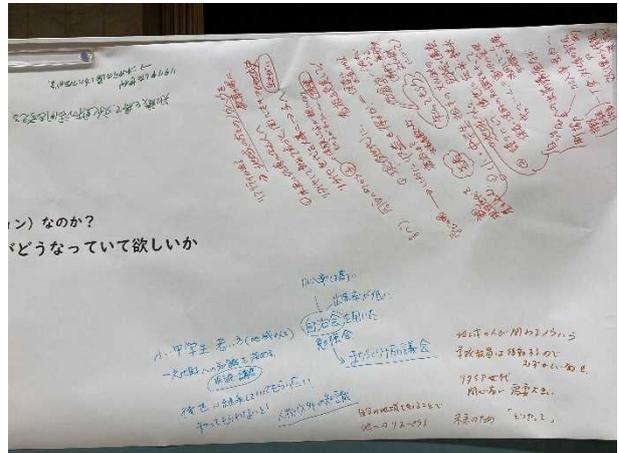
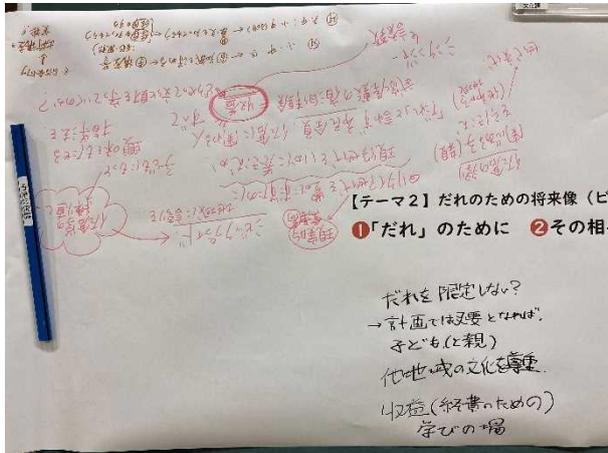
(2-3)



・ターゲットとして「リタイア世代」が挙がっているが、元々東京都に勤めていた方が定年退職して時間ができて、

改めて佐倉市のことを勉強しようと思ってくれることが非常に多い。そのような学習意欲が高い世代の方々には歴史の語り手にもなれる。「だれのために」と聞かれたときに「次世代」や「将来の子どもたち」と思った方もいたかと思うが、その「次世代」とこれから出てくる「リタイア世代」をどのようにして結びつけるのかも重要なテーマになってくると思う。

(2-4)



いくつかのテーブルで「収益」の話が出ていた。「相手がどうなっていて欲しいか」という話題から派生していったものと思うが、やはり文化財を修理・維持していくためにはどうしてもお金がかかってしまう。最近では文化庁でも、保存だけでなく活用にも取り組むことにより費用を補う取組みを積極的に進めている状況である。その中で、佐倉市はどうしていくのかという議論は更に深めていく必要があると思う。しかし、文化財を積極的に活用していくにあたっては、収益を上げることが目的ではなく、あくまで手段として計画の中できちんと基準や体制を打ち出したうえで活用していくものではないかという意見もあった。

3. まとめ

- ・今回ワークショップ形式でお話いただいたことで、委員の皆さん同士で、こういう人がいる、こういう考えを持っているということを知り、交流を深めていただくきっかけになったのではないかと思います。
- ・次回の開催形式は検討中だが、今回の協議会を踏まえ、実際にどのような将来像を設定していくのかが今後の作業になってくる。次回以降は、具体的なビジョンに対する基本的な方針や目標、成果指標などを設定していき、さらには目標を実現するための具体的な取組みを考えていくことになる。事務局では、これまでの佐倉市の文化財行政で行ってきた取組みやその成果の情報をまとめているので、それを共有しながら議論を深めていきたい。

以上